佐渡ジオパーク

10周年記念誌

佐渡ジオパーク

GEOPARKS JAPAN
日本ジオパーク

佐渡ジオパーク日本認定10周年を迎えて
～佐渡でめぐる大地と人の物語～

佐渡ジオパーク推進協議会会長・佐渡市長
渡辺　竜五

かつては大陸の一部であった佐渡島は、大地が裂け、裂けた部分が一度海の底に沈み、そして再び隆起をして誕生しました。この時間は 3000 万年にも及ぶ壮大な出来事でした。古事記では大八嶋国の７番目として登場し、日本の歴史の中では、流刑地として順徳上皇、日蓮聖人、日野資朝、世阿弥などが流されてきたと記されています。

また、佐渡は平安時代から金の島といわれ、相川の金山は江戸幕府の財政を支え、日本中から多くの人が集まりました。この繁栄が佐渡に豊かさを育み、経済と共に能などの文化が栄えました。そして、人口を支える食糧生産のために水田が開発され、その昔ながらの農法は現代にまで引き継がれています。そのことによって、生物多様性の高い里山の水田は、日本産朱鷺を最後まで支えただけでなく、現在の平野や中山間地での無農薬、減農薬の取組が、絶滅から野生復帰を可能にしました。

大地の変動によって誕生した佐渡島を舞台に、人々の想いが紡がれ、累々と積み上げられた歴史の物語を楽しめるところが、佐渡ジオパークの大きな魅力と考えています。

佐渡ジオパークは、2013 年に日本ジオパークに認定されてから 10 周年を迎えることができました。この間、ジオサイトの保全と整備、学習･教育への活用、世界農業遺産や「佐渡島の金山」と連携したジオツーリズムの推進などに取り組んでまいりました。再認定審査の対応なども含め、ご指導、ご支援を賜りました皆さま方に深く感謝申し上げます。

この 10 周年を機に、「佐渡でめぐる大地と人の物語」は第２ステージを目指します。ジオサイトを拠点に、学びのツーリズム、カヤックや自転車などを活用した自然探索ツーリズム、そしてこの島の人々が継承してきた能や鬼太鼓などの文化体験ツーリズムなど、大地と人の物語を島民から来島者まで様々な方に体験いただき、歴史や自然の息吹を感じることができる佐渡ジオパークとして成長していきたいと考えています。

また、新たに挑戦した脱炭素先行地域とＳＤＧｓ未来都市の実現、そして、世界文化遺産登録が目前となった「佐渡島の金山」が持続可能な島づくりにつながり、これらの取組が 22 世紀に向けた新しい挑戦となり、人の新しい物語として、島に刻み込まれることに期待をしているところです。

市民の皆さまを始め、佐渡ジオパーク推進協議会会員の皆さま、関係各位からのより一層のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

佐渡でめぐる 大地と人の物語

佐渡ジオパーク10周年記念誌

佐渡ジオパーク日本認定10周年を迎えて
～佐渡でめぐる大地と人の物語～　佐渡ジオパーク推進協議会会長・佐渡市長 渡辺　竜五……1

祝辞　佐渡ジオパーク10周年を祝して　糸魚川ジオパーク協議会会長・糸魚川市長 米田　徹……3

祝　佐渡ジオパーク10周年　苗場山麓ジオパーク振興協議会会長・津南町長 桑原　悠……4

佐渡ジオパーク10周年に寄せて《寄稿文》

佐渡ジオパークを詠む
前日本ジオパーク委員会委員長・
京都大学名誉教授　尾池　和夫……6

ジオパークと知的観光の楽しみ
元日本ジオパーク委員会委員・
元佐渡ジオパーク推進協議会顧問・
東京学芸大学名誉教授　小泉　武栄……8

佐渡の記憶を辿ってみました
日本ジオパークネットワーク副理事長・
元文化庁文化財調査官　桂　雄三……10

佐渡ジオパーク10周年に寄せて
元日本ジオパーク委員会委員・
一般社団法人全国地質調査業連合会相談役・
応用地質株式会社会長　成田　賢……12

佐渡ジオパーク設立当初の思いで
元佐渡ジオパーク推進協議会会員・
新潟大学名誉教授　野崎　眞澄……14

佐渡自然誌博物館の実現へ！
佐渡ジオパーク推進協議会調査研究部会員・
新潟大学佐渡自然共生科学センター・BOTANICAL ACADEMY　崎尾　均……16

「よくわかる佐渡」「そして世界へ」
佐渡ジオパーク推進協議会会員・
新潟大学理学部教授　松岡　篤……18

佐渡ジオパークに期待すること
元佐渡ジオパーク推進協議会会員・
新潟大学教育学部長　藤林　紀枝……20

佐渡島の自然や文化に魅せられて
佐渡ジオパーク推進協議会顧問・
元佐渡市教育委員会教育長　渡邉　剛忠……22

推進室設立までの思い出
～手作りのジオパークづくりを基本にスタート～
佐渡ジオパーク推進協議会調査研究部会副部会長・
前佐渡市ジオパーク推進室推進指導員　池田　雄彦……24

佐渡ジオパーク　10周年に寄せて
佐渡ジオパーク推進協議会会員・
NACS－J自然観察指導員　中川清太郎……26

佐渡ジオパーク誕生10周年、
まことにおめでとうございます！
元佐渡ジオパーク推進協議会会員・
初代佐渡ジオパークガイド協会会長　岩立　恒……28

熱い議論を経て誕生した
佐渡ジオパークガイド協会
元佐渡ジオパーク推進協議会会員・
前佐渡ジオパークガイド協会会長　児玉　功……30

佐渡ジオパークガイド協会も10周年
佐渡ジオパーク推進協議会会員・
佐渡ジオパークガイド協会会長　池　善世……32

佐渡ジオパークを振り返るとき
佐渡市ジオパーク推進室推進指導員　相田　満久……34

年表　佐渡ジオパーク　10年の歩み……36

あとがき　佐渡ジオパーク　これからの10年　佐渡ジオパーク推進協議会事務局……39

佐渡ジオパーク10周年を祝して

糸魚川ジオパーク協議会会長
糸魚川市長　米田　徹

佐渡ジオパーク 10 周年、誠におめでとうございます。2013（平成 25）年 9 月 24 日の日本ジオパーク認定から今日に至るまで、渡辺竜五会長をはじめ関係者やスタッフの皆様の変わらぬ熱意と弛まぬ努力に対し、心から敬意を表するものであります。

思い返せば 10 数年前、当時の佐渡市長で佐渡ジオパーク推進協議会長を務められていた甲斐元也さんとは、彼が県糸魚川地域振興局長だったころから交流があり、地方都市が抱える課題や対策などについてよく意見を交わしたものです。実のところ「ジオパーク」をお勧めしたのは私なんですけれども、佐渡には「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」があり、世界農業遺産（GIAHS）に登録された「トキと共生する佐渡の里山」があり、３億年から 300 万年前にわたる特徴的な岩石や地層があり、鬼太鼓や能楽などの歴史・文化遺産もしっかりと受け継がれているわけです。これほどバリエーション豊かで優れた「故郷の宝物」をつないで活かせるプログラムはジオパークしかない、一緒にやっていきましょう、というような話をさせていただきました。さらに佐渡が認定された翌年に苗場山麓ジオパークが仲間に加わり、県内にジオパークの輪が広がったわけであります。

ジオパークを統括するユネスコからは、認定地域の相互交流や国際的なネットワーク貢献などが求められております。2016（平成 28）年には、佐渡・糸魚川・苗場山麓の３地域が連携して朱鷺メッセで「ジオパーク新潟国際フォーラム～東アジアのネットワークを広げよう～」を開催しました。２日間の来場者は 2,500 人を超え、私たちのジオパークを国内外に広く発信することができたものと思っています。このフォーラムを契機にジオパークの特色を活かした体験教育旅行の誘致、子ども交流事業やガイド意見交換会などの連携事業を定期的に行ってきました。これからも志を同じくする仲間として協力し高め合いながら、各地域の持続可能な発展を目指して歩みを進めてまいりましょう。

結びになりますが、佐渡ジオパークのますますの発展と関係者の皆様のご活躍を心よりご祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

祝　佐渡ジオパーク10周年

苗場山麓ジオパーク振興協議会会長
津南町長　桑原　悠

佐渡ジオパーク推進協議会の皆様、日本ジオパーク認定 10 周年誠におめでとうございます。平成 25 年の認定から、佐渡の「島づくり」や「人づくり」を牽引してこられた皆様に対し心より敬意を表します。

私ども苗場山麓ジオパークは、翌年の平成 26 年に日本ジオパークに認定されました。そのため、認定に向けて、前年度、同じ新潟県から認定申請をされた佐渡ジオパークの幕張メッセで大観衆を前に行われた公開プレゼンテーションを拝聴し、認定申請書の作成や現地審査などの取り組みをお手本にさせていただきました。佐渡ジオパークの再認定審査時にも同行させていただきました。そして、その後の活動でも常に先を歩んでおられます。

新潟圏域のジオパークガイドが集まり意見交換の場を作る際も佐渡ジオパークの皆様からのご発声で始まり、苗場山麓ジオパークでも昨年、意見交換会を実施させていただきました。

第 1 回目が佐渡で開催され、参加したガイドからは、佐渡ジオパークのガイドさんから佐渡の成り立ちを聞き、それまでも何度も訪れたことがあった佐渡島に、新たな気づきと驚き、感動、そしてガイドの役割と必要性を知ることができたと報告をいただきました。

苗場山麓ジオパーク内の小学校では、糸魚川ユネスコジオパークを訪れたり、修学旅行先に佐渡島を選んでいる学校もあります。これも日頃のジオ学習が実を結んだ一つのカタチです。

同じ、新潟県において平成 20 年に認定の糸魚川ジオパーク、平成 25 年に認定の佐渡ジオパーク、そして、平成 26 年に認定の苗場山麓ジオパークは、3 兄弟のようなものです。

末っ子として、2 人の兄の背を追いかけながらこれからも新潟県内において、ジオパーク活動を積極的に連携し実施していきたいと考えております。

また、新潟県内のみならず、長野県ともまたがる苗場山麓ジオパークは、南アルプスジオパークとも連携し、さらに、中部ブロック、全国のジオパークの方々と繋がりながら、ジオパークプログラムの保全、教育、持続可能な活動を共に歩んでいきたいと思います。

これからも佐渡ジオパーク、そして、日本ジオパークネットワークの発展を祈念してお祝いの言葉といたします。

佐渡ジオパーク10周年に寄せて

《寄稿文》

佐渡ジオパークを詠む

前日本ジオパーク委員会委員長・京都大学名誉教授
尾池和夫

２０１３年９月２４日火曜日、台風が小笠原に近づいてきて空が霞んでいた。赤坂の伝統工芸館で塗りの椀を買って、産総研の別館１階の会議室に入った。阿蘇を世界ジオパークに推薦することを決め、佐渡、三陸、三笠など１０か所を日本ジオパークに認定することを決めた。夕方、そのことを記者会見で発表した。

佐渡は日本海最大で、しかも鉱山がある島である。大佐渡山地と小佐渡山地が北東ー南西方向に細長く伸びており、その間に国中平野が広がる。地図に親しみを持った小学校以来、私は興味深い地形だと思っている。〈佐渡ヶ島ほどに布団を離しけり　櫂未知子〉の句がある。少し遠慮して離しているが、手を伸ばせば届く距離を、冬の季語で表現した。

たらい舟の尾池葉子、尾池和夫夫妻

それまで佐渡には行ったことがなかったが、ようやく２０１３年１１月１６日土曜日、宇治市の家を９時４０分に出て、夕日の沈むとき両津に着いた。少し雲があったが雲の合間にはっきりと沈む夕日を見ることができた。市橋さんほか数人の方の出迎えをいただき、夕暮れの国中平野を走って真野のホテルに着いた。

翌日日曜日、相川へ向かった。道遊の割戸のＶ字の姿は迫力があった。坑道を見学し、土産に小判を買い、小木へ向かった。北前船の帰港した小木に近い宿根木には、北前船の船主や船員、船大工といった廻船業の関係者が住んでいた。昼食のジオパスタには唐辛子が真ん中に大きく構えて噴火を現していた。茸が美味しかった。書家、医者、地理学者柴田収蔵生家という看板が面白かった。よく知られている「鼓童」のポスターもあった。たらい舟に乗って自分でうまく漕ぐことができたのは、やはりうれしかった。博物館を訪問した。市橋さん、小林さん、野口さん、甲斐市長、渡邉さんたちと話した。講演会には１６０人が集まり、質問に熱心すぎる人もいた。元ＮＨＫの記者、加藤廣文さんにも会えた。１９７８年、中国で唐山地震現場を取材して以来の再会だった。

１８日月曜日、海が荒れてきたので、９時２５分のフェリーで島を出た。市橋さん、野口さんたちに見送っていただいて出港した。新潟県議会議長がおられたので泉田知事に佐渡ジオパークを訪れるようにという伝言を頼んだ。波が高くなっていたが、ジェットフォイルの威力は凄く、快適に海の上を走った。

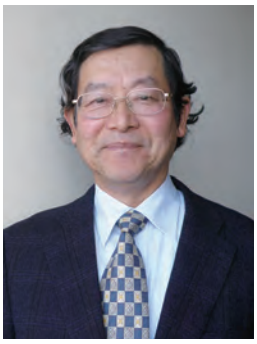
〈荒海や佐渡によこたふ天河　芭蕉〉の句が知られている。元禄２年７月７日の直江津での発句である。この夜、直江津は夜になっても雨が降っており、夏の日本海は静かである。この句は心象であり、多くの有名な流人のことが思い起こされる句である。〈罪無くも流されたしや佐渡の月　ドナルド・キーン〉は、氏が佐渡を訪れた時の句であり、氏の心が詠まれている。次の機会には佐渡にゆっくり滞在しつつ、私も佐渡ジオパークでの句を詠みたいと思っている。

北限の蜜柑に
佐渡の日射しかな

和夫

ジオパークと知的観光の楽しみ

元日本ジオパーク委員会委員・元佐渡ジオパーク推進協議会顧問・東京学芸大学名誉教授
小泉武栄



日本でジオパークの制度が発足したとき、私はたいへんうれしく思った。植物や鳥などに比べれば地味で、愛好者も決して多くはない地形・地質が、少しだがやっと日の目を見るようになったからである。

地学的な現象をテーマにしたテレビ番組にはブラタモリがあって、謎解きの楽しさを味わわせてくれているが、ジオパークの場合も最大の特色は、ただ見て楽しむだけでなく、頭を使う観光だということにある。

たとえば、三陸の八戸のそばに種差海岸という美しい草原に覆われた砂丘がある。ここが砂丘だということを誰も疑わなかったが、私は海岸に砂浜がないことに疑問を持ち、調べてみた。すると砂丘に見えた地形は実は砂丘ではなく、平安時代の915年に十和田カルデラの内部にある火山から噴出し、飛んで行った軽石だということが分かった。現場で銀色に輝く軽石を観察してその不思議さに驚かない人はいない。

また佐渡ジオパークには、平根崎という海岸の観光地があり、そこには傾いた岩盤の上に無数の甌穴（ポットホール）ができていて、国の天然記念物になっている。説明板を読むと、甌穴は強い波浪による侵食でできたと書いてある。しかしよく考えると、波浪がいかに激しくとも20mもの高さまで影響を及ぼすとはとても考えられない。ではなぜこんな高いところに甌穴ができたのだろうか。うまく説明できないので、そこを訪れた人たちは、うんうんいって考え、成因について議論することになる。こうした作業は実に楽しいし、知的な興奮も伴う。また現場では少し危険な場所を歩くので、頭が活性化し、健康面への貢献も大きい。

ジオツアーではこのように知的な活動に加え、適度に身体も使うために、ツアーの参加者には健康で長生きしている人が多い。筆者の関わっているグループの場合、70歳台から80歳に近い年齢になっても、好奇心旺盛で野外を歩き回っている人が少なくない。高齢にも拘わらず、よく感動し、かなりの程度の登山も可能な体力を保っているのだから、たいしたものである。私は20年余りにわたって、社会人の皆さんをジオパークなどに案内してきたが、たいへん好評である。安全には考慮しているので、事故も起きていない。

ほかにも小木海岸の隆起海食台や、新潟大学演習

林の杉の巨木林、金山など、佐渡ジオパークには、見るべきところが実に多い。この点は４０余りある日本のジオパークの中でも別格といえよう。残念なことに近年、新聞などでジオパークが取り上げられる機会が減ってきたが、新潟県や佐渡市では、たとえば、朝日新聞の一面を買い切って広告をするなど、時にはだいたんな手を打ってほしいと思う。

ついでで申し訳ないが、ジオパークの関係者にもう一つお願いしたいことがある。それはジオパークの説明に、植生や昆虫など、生物に関する説明を加えることである。スタッフには地質学者が多いので、説明がどうしても地質中心になってしまう。しかし世の中には生き物に興味を待っている人が圧倒的に多い。そのため種差海岸の例のように、説明に生き物とジオの関係を取り入れると、途端に魅力が高まってくる。専門外の説明を取り入れるのはいろいろたいへんだと思うが、自然というものはもともと境界がないものである。ジオパークの魅力を高めるために、ぜひ頑張っていただきたいと思う。なお私著で恐縮だが、昨年、私は『日本の自然風景ワンダーランド』という本を上梓した。ジオパークの説明に必ず役に立つと思うので、ぜひご覧いただきたい。

平根崎の甌穴

佐渡の記憶を辿ってみました

日本ジオパークネットワーク副理事長・元文化庁文化財調査官　桂　雄三

佐渡ジオパークの活動が10年の節目を迎えられたこと、心よりお慶び申し上げます。うろ覚えですが私の佐渡との関わりは、文化庁に勤務していた平成の時代の初めに遡ります。

合併前の小木町にあった天然記念物及び名勝「佐渡小木海岸」で行われる現状変更行為の許認可申請の処理です。港湾や漁港施設整備に伴う防波堤設置や入江に散在する集落のインフラ工事。佐渡一周線整備に伴う深浦などでの架橋工事、あるいは、現在ではジオサイトになっている琴浦、矢島・経島、城山辺りでの遊歩道整備などが記憶に残っています。

こうした許認可事業の現地調査の合間には、当時小木町の文化財にいらした高藤さんから宿根木の重要伝統的建造物群や、横井戸、回船業で栄えた往事を偲ぶ民俗資料や復元された千石船など、小木半島での暮らしや歴史に関するお話も伺う機会がありました。

平成19年には、ラムサールセンターの音頭で、シンポジウム「生きものと人・共生の里を考える」で、出水、周南、豊岡市に地元佐渡市、新潟市、阿賀野市や関係省庁とともに伺う機会がありました。環境省の方が生物多様性のお話をされた後、私が天然記念物のお話をさせていただきました。生物の多様性よりも失われつつある人の暮らしの多様性にふれたところ、講演後に地元のトキの保護に関わっていらっしゃる方たちから好意的な反応があったことを覚えてい

小木町城山下の遊歩道沿いの溶岩。現在遊歩道は一部閉鎖されているが、溶岩と火山灰を見学できる絶好のルート。2020年3月24日撮影

ます。

その後、佐渡でジオパークの活動が始まり、文化庁退職後の平成27年のバレンタインデーにジオパークの専門員であった市橋さんに声をかけていただきジオパーク・シンポジウムに参加させていただきました。多彩な顔ぶれの女性だけのパネルディスカッションで大盛況でした。令和2年には、ジオパーク推進室の北見さんから連絡いただき、相田さんも交え、城山、琴浦、矢島・経島や宿根木の整備について、佐渡地域振興局や環境対策課の方々と現地も含めた意見交換ができました。夜は、渡邉剛忠さんも交えた懇談をさせていただきましたし、翌日は、外海府から大野亀など、いままで行くことができなかった車田などの地域も見学させていただきました。この間、新潟大学名誉教授の小林巌雄先生には、現地調査を始め、様々な場面でお世話になりました。

ジオとしての佐渡は、日本海形成以前のユーラシア大陸の東縁であった頃に始まり、日本海拡大時の火成活動と金鉱脈の形成、応力場の変化により傾動しつつ隆起した大佐渡島と小佐渡島、そして砂州の発達により二島が繋がり現在の東アジアモンスーンの影響を強く受けた佐渡島となります。佐渡は、古来隔絶した流刑の島ではありましたが、北前船の寄港地であり金銀山という重要な資源の産出地でもありました。このため京都・大坂や江戸との最新の情報や能など文化を伝える人々が往来する島でもありました。現在の佐渡を語る様々な資源や要素が基本的にジオに基づいていて、さらにそれが、有機的な関係性をもっているということを伝え続けてゆくことが肝要かと思います。

「ジオパーク・シンポジウム」パネルディスカッション（2015年2月14日佐渡中央会館）

佐渡ジオパーク10周年に寄せて

元日本ジオパーク委員会委員・一般社団法人全国地質調査業連合会相談役・応用地質株式会社会長
成田 賢

佐渡ジオパークが日本ジオパークの認定から10周年を迎えられましたこと、心からお慶び申し上げます。

また、この10年間、佐渡ジオパークの発展にご尽力されてこられた佐渡ジオパーク推進協議会を中心とする関係者の皆様に心から敬意を表します。

私は2021年まで全国地質調査業協会連合会の会長を務めており、2013年の日本ジオパークの認定申請に対して行われた3日間の現地審査に、日本ジオパーク委員会委員として参画いたしました。あれから早いもので10年が経過しましたが、佐渡ジオパークの活動は着実に地域に根差し、発展しており、審査に加わった者として、とても嬉しく思っているところです。

この度は、10周年記念誌に寄稿する機会を与えていただき、心から感謝しております。

2013年の現地審査では、関係者の皆様に多くのジオサイトを案内していただき、ガイドの方から大変熱意ある説明を受けました。また、佐渡ジオパーク推進協議会の皆様からもジオパークを設立し、維持・発展させるためのこれまでの取り組みと今後の構想について、大変丁寧で熱意のある説明を受けたことを記憶しています。特に教育に対する取り組み、ジオツーリズムに対する理解、保全に対する取り組みには大変感心いたしました。そして説明を受ける中で、佐渡島は豊かな歴史文化と自然を合わせ持った地域のため、魅力的なジオパークとなるだろうと確信していったことを思い出しました。また、ガイドの方も協議会の方々も佐渡島をしっかり理解され、他の地域に無いところを冷静に見出し、それを全国に発信していこうという強い意欲を持たれていました。

さらに佐渡島の成り立ちが生み出したジオが、例えば佐渡島の金山の歴史や

2013年 日本ジオパーク現地審査でマスコミのインタビューに答える

特別天然記念物であり、絶滅危惧ⅠA類であるトキの生育に密接に関連しているという、大変ユニークなジオストーリーを描かれていました。

このような審査時の取り組みを、佐渡ジオパークとしてこの10年間さらに発展させ、「佐渡ジオパーク教材」の作成や佐渡内陸部を初めて巡る自転車イベント「佐渡ジオパークサイクリングツアー」の実施、2016年から佐渡ジオパーク動画サイトでのジオサイトの紹介、何よりも2020年から開始した「ぶら～り　ジオパークだっちゃ！」で紹介するジオの楽しさには、本当に感動した次第です。この他にも伝統料理や工芸品の制作体験を提供することで、地域の文化発信に貢献すると同時に、観光客に佐渡の魅力を伝えること等にも積極的に取り組まれています。

このような活動を見ていると、佐渡ジオパークは佐渡島の地質学的特徴をベースとして生み出された自然・文化・歴史を総合的に活用し、持続可能な地域の発展や地域コミュニティとの協働を積極的に進める地域振興のプラットフォームになっているように見えます。

10周年を迎えた佐渡ジオパークは、これまで以上に地元住民と共に持続可能な地域社会の実現に向けて活動していくことが十分期待できる段階に来ていると思います。そして、これからの10年、そしてさらに10年と着実に次のステージを形成されていくものと確信しています。佐渡ジオパークの関係者の皆様には、これからもどうかこの活動を楽しみながら大いに進め、多くの人たちが地球と人類を愛するような活動を期待しています。今後のご発展を心よりお祈りいたします。

国中平野・加茂湖ジオサイトでガイドの方からのご説明

佐渡ジオパーク設立当初の思いで

元佐渡ジオパーク推進協議会会員・新潟大学名誉教授
野崎眞澄

私が佐渡ジオパークに関わり始めたのは、ちょうど現役を離れる少し前のことでした。現役時代は、新潟大学理学部附属臨海実験所で、海洋生物の研究・教育に携わってきました。佐渡が日本ジオパークの認定を受けたのは、2013年9月なので、認定後、ほどなくの2014年3月の退職でした。佐渡市が日本ジオパーク認定をめざして活動を始めたその頃を振り返りたいと思います。

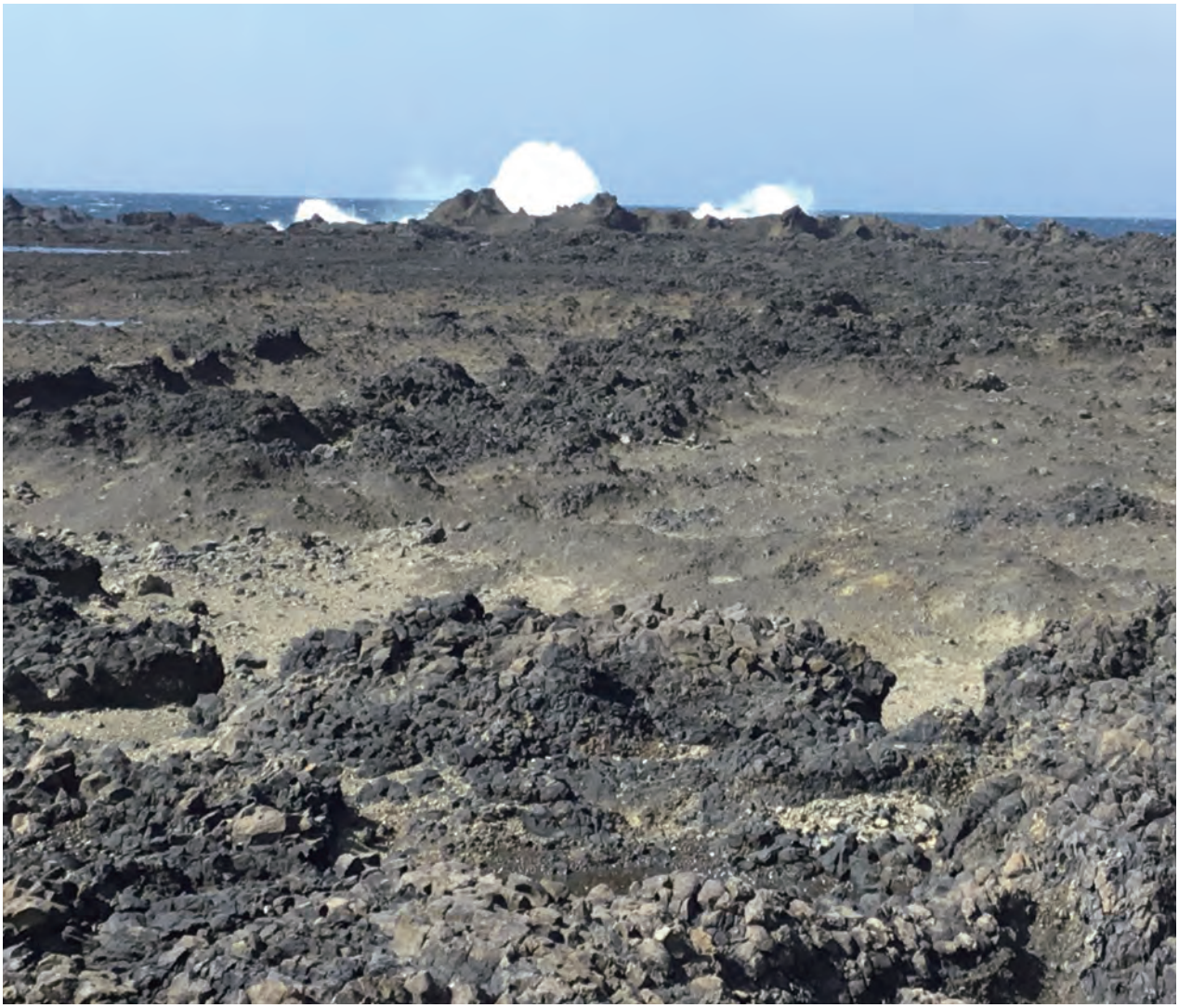
新潟大学理学部では、佐渡に関わる以前より糸魚川市にあるフォッサマグナミュージアムの運営に深く関わり、糸魚川ジオパークの様々な活動を支援してきました。そこで、新潟大学理学部より、ぜひ佐渡にもジオパークをとの提案がなされました。

私の日記に佐渡がジオパーク関連で初出するのは、2009年7月8日で、『新潟大学理学部地質科学科の松岡先生と赤井先生が佐渡に出かけ、ジオパークに関連した意見交換をしました。対応したのは、佐渡市教育委員会社会教育課の佐渡学センター、文化学芸係の野口敏樹係長です。なお、野口係長の職場は両津郷土博物館』です。当時の佐渡市長は、旧真野町長だった髙野宏一郎さんでした。彼の強力なリーダーシップのもと、2011(平成23)年5月11日、ジオパーク推進協議会が設立され、ジオパーク認定に向けて一気に走り出しました。私はこの協議会の調査研究部会（部会長：新潟大学名誉教授の小林巌雄先生）に所属し、2010年3月～2017年8月まで、佐渡のジオサイト調査活動に関わりました。佐渡の動植物や地質に詳しい人たちと調査活動をしたのは良い思い出です。事務局（池田雄彦、神蔵勝明）、専門部会（中川清太郎、加藤恭子、野崎眞澄）の5名と、行政（市橋弥生、貞包健良）が当時の活動の中心でした。

シロウミウシ

地質学的に意義のある岩石や地層の露頭やそれに関連のある生態系、文化・歴史の見られる場所をジオポイントと言いますが、最初に行われたのは、ジオポイントのリストの制作でした。そして、そのリストは佐渡島全体に分布する10ヶ所のジオサイトからなる合計240件のジオポイントに及びました(2013年3月発行の調査研究報告書 佐渡の自然史　第1号＝創刊号の資料1)。実際の現地調査は、佐渡の地質に詳しい小林巌雄先生や元両津高校教諭の神蔵勝明先生らにより実施されました。私が現地調査をしたり、案内板などの立て札作りをしたのは、宿根木を中心とした小木半島ジオサイトでした。同じ頃出版された、島津光夫先生（新潟大学名誉教授）と神蔵勝明先生共著の『離島 佐渡第2版（2011年8月22日)』では､佐渡ジオパークの試案が述べられ、8ヶ所の有力なジオサイトの他に数カ所のジオサイトも記されています。

なお、佐渡がジオパーク認定を目指していた同じ頃、白滝黒曜石、小田原･箱根、天草、阿蘇、霧島なども、同じようにジオパーク認定を目指して活動していました。これらの他のジオパークが基本的に狭いエリアであるのに対して、佐渡は他地域の何倍も広いエリアを持ち、しかも海岸から、国中平野、そして大佐渡と小佐渡の山間部までそろっているわけで、大変なことに挑戦していると、つくづく感じたものでした。



宿根木の隆起波食台

佐渡自然誌博物館の実現へ！

佐渡ジオパーク推進協議会調査研究部会員・新潟大学佐渡自然共生科学センター・BOTANICAL ACADEMY
崎尾　均

佐渡島の自然は、ジオ（地殻）の上に森･里･海がどっしりと乗っかり形成されている。佐渡島は日本海に位置する島独特の湿潤な気候で、山と海が迫った急峻で自然度の大きい大佐渡地域、一方、標高が低く歴史的に人為の影響が高い小佐渡地域、その間に挟まれた穀倉地帯である国中平野で形成されている。生物相はこれらの歴史的な地形形成の影響を大きく受けてきた。そのため、北方と南方の生物が入り混じって、種多様性は非常に高い。また、現在は大型の草食動物が生息していないために、植物相が非常に豊かで「花の島」とも呼ばれ、佐渡島最高峰の金北山は「新・花の百名山」に登録されている。特に、オオミスミソウ（雪割草）やカタクリ、キクザキイチゲ、シラネアオイなど春の植物は見応えがある。佐渡島には、現在は高山帯や亜高山帯は存在しないが、過去にこれらの生態系を構成していたハクサンシャクナゲ・ツバメオモト・クルマユリ・ゴゼンタチバナなどの植物が残存している。大佐渡山地に分布するスギの天然林は、江戸時代に幕府の「お林」として管理されてきた。そのために樹齢500年に近いスギの樹木が多く残存している。スギの天然林は日本中に多く分布しているが、佐渡島のスギは冬季の風雪の影響を受けて、異形のスギを形成しており、「風雪が作り出した芸術作品」と言ってもいいほどである。一方、暖かな小佐渡などの海岸線にはタブノキやスダジイなど常緑広葉樹林が分布している。また、佐渡島には、平安時代に牛が入ってきて、大佐渡山地で夏の間、林間放牧が行われてきた。それによってドンデン高原周辺には、純度の高いシバ草原が広がっており、シバ地特有の植物が分布している。このような生態系が評価されて、ドンデン高原は「未来に残したい草原の里100選」に選ばれた。以上のように、佐渡島の自然は様々な地形や異なる気象環境によって高い多様性を保持している。

ドンデン高原：牛馬の放牧が行われていたが，数年前に放牧は終了した

佐渡島の天然スギの写真：天野尚さんが撮影した金剛杉の写真が佐渡島の天然スギを一躍有名にした

ジオパークの登録初期には、佐渡島の自然のプラットフォームとして自然誌博物館の設立が計画されていたが、ジオパーク10周年や世界文化遺産の登録を前にし、その計画の機は熟したと考えられる。この設立に関しては、産官学の共同が必要である。新潟大学佐渡自然共生科学センターは、佐渡島の森・里・海の自然と人間の共生を総合的に科学する教育研究機関であり、市民と連携したシチズンサイエンスやオープンサイエンスを目指して、佐渡市と連携した自然共生のプラットフォームの設立を目指している。また、ADA（アクアデザインアマノ）は、佐渡市に天野尚さんの写真を提供する意向があり、自然誌博物館の展示パネルとしては最適な展示物である。海中のコブダイから始まり、佐渡の海岸地形、里山の景観、スギの天然林など数えきれない自然のオンパレードで、まさに佐渡島の地質・森・里・海を網羅した自然を切り取った珠玉の芸術である。

佐渡島の自然は歴史的には一次産業の根幹を支えてきた。森林は木材生産、里は米生産、海は魚類や海藻などである。また、自然はジオパークツアー、エコツアー（森）、トキツアー（里）、ダイビング（海）などの観光資源としても重要である。自然は、観光だけでなく食文化など今後のSDGs（Sa Do Ga shima）の基幹ともなる資源である。この自然誌博物館の設立は、教育研究の推進だけではなく、各種の自然ガイドの情報共有の場として、市民の交流の場として、また観光客のガイダンス施設としても重要な役割を果たすことが期待できる。

新潟大学演習林の連結杉：冬季の深い積雪によって幹や枝が変形し異形のスギとなっている

「よくわかる佐渡」「そして世界へ」

佐渡ジオパーク推進協議会会員・新潟大学理学部教授　松岡　篤

初めて佐渡を訪れたのは新潟大学に着任してすぐのことでした。まだ、佐渡金銀山が稼働していた頃です。それ以来、研究・教育・普及活動の場として、何度も佐渡の地に足を運んできました。その成果として作成に携わった論文・報告書・書籍が20編を超えています。このことは、新潟に移り住んでからの私の活動が佐渡と深く関わってきたことを示しています。これらの著作物の中でも、2013年発刊の「ジオパーク－大学から地域へ、そして世界へ－」（以後、「そして世界へ」）と2022年発刊の「よくわかる佐渡ジオパーク　自然とひとの暮らし」（以後、「よくわかる佐渡」）の制作にかかわったことが、とくに強く印象に残っています。これらの紹介を含めて、佐渡の地質にまつわる研究課題について述べることにします。

「そして世界へ」は、発刊年からわかるように佐渡がジオパークになる前の私の活動記録といえます。私の専門分野は古海洋学ですが、佐渡のまわりの海で採取したプランクトン（図1）の観察をとおして、海というものの理解を深めることができました。佐渡では海沿いに地層がよく露出しています。海を眺めながらそこで形成された地層を観察するという贅沢な体験ができるのも佐渡ならではのことです。この海と地層の両方を一緒に観察するという経験が、私自身の研究・教育・普及活動に生かされていると感じています。

「よくわかる佐渡」に示されるように、佐渡の地史は4つの時代に区分されます（図2）。それらは、太古の時代、大陸の時代、海の時代、島の時代です。

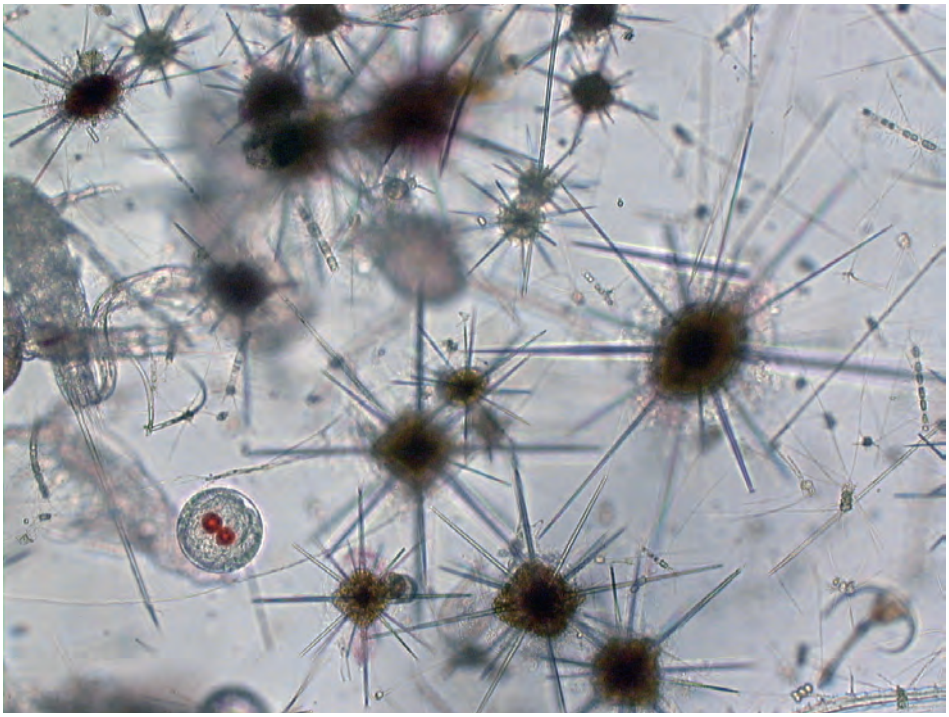


図1　佐渡達者沖の日本海で採取したプランクトン．多数のトゲをもつ個体はアカンタリア目の放散虫．

それぞれの時代の地層がどこに分布しているのかは、この書物では各時代に対応する４点の図に表現されています。一番新しいのは島の時代で現在を含みます。「よくわかる佐渡」では、地史を説明する書物には珍しく、古い方から新しい方へという時間の順序を崩して、島の時代の記述が最初です。これは、佐渡の自然と私たちの暮らしとのかかわりが重視されているためです。

佐渡のまわりの海岸には砂浜や礫浜があります。そこで見られる砂や礫は佐渡の山からもたらされたものです。佐渡では、砂や礫は“地産地消”の状況にあるといえます。では地産地消が始まったのはいつからでしょうか。佐渡が海面に出現したのはいつなのかという時期の問題です。隆起が著しい佐渡では、海底の一部が海面上に頭を出し始めてから後に周囲の海で形成された地層が、現在では島の上に露出しています。島が大きく成長していく過程が佐渡の地層の中に記録されているといえます。その記録を解読することにより、海の時代と島の時代の境界年代を厳密に示すことが可能です。島の時代の開始時期を正確に決定することは、今後追求するべき重要な研究課題の一つだと思います。

最後に、佐渡ジオパークに対する将来の希望について述べます。これはそのものズバリ、「そして世界へ」です。佐渡ジオパークに１日も早くユネスコ世界ジオパークになってもらいたいというのが私の願いです。

文献　松岡　篤・栗原敏之，「ジオパーク　－大学から地域へ，そして世界へ－」，新潟日報事業社，70 p.，2013 年
佐渡ジオパーク推進協議会（編），「よくわかる佐渡ジオパーク　自然とひとの暮らし」，文一総合出版，171 p.，2022 年

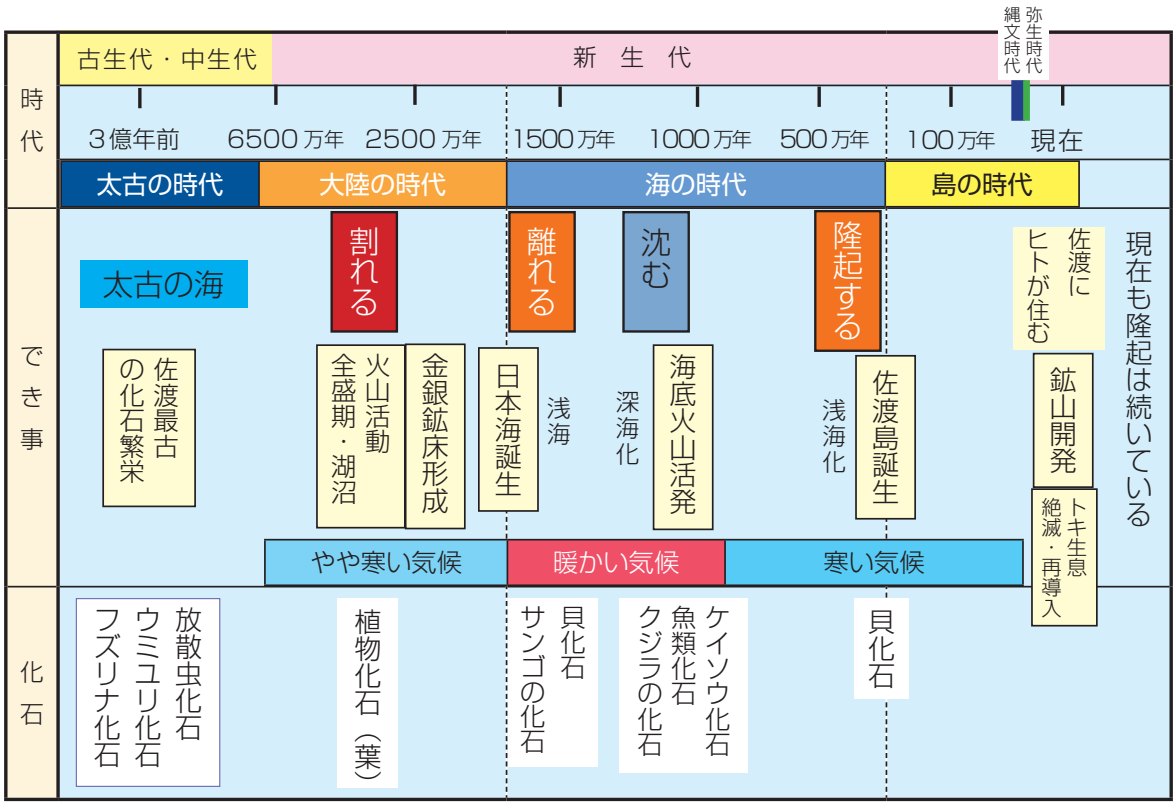


図２　佐渡の地史の概要（よくわかる佐渡ジオパーク　自然とひとの暮らし，P.11より）

佐渡ジオパークに期待すること

元佐渡ジオパーク推進協議会会員・新潟大学教育学部長
藤林紀枝

佐渡ジオパークには日本ジオパーク認定前の暫定期間から関わらせていただきました。故小林厳雄教授を含む主力メンバーの方々が、当初からジオサイトの調査、整備、資料やパンフレットの作成など長年頑張ってこられたことに、まずは敬意を表したいと思います。その成果として、2013年6月に発行された「佐渡島の自然（地学編）―ジオパーク開設書―」（神蔵勝明・小林厳雄・池田雄彦・遠藤満久，佐渡市教育委員会・佐渡ジオパーク推進協議会）では、専門的な知見を基に佐渡島全体の成り立ちが詳しく解説されました。また、昨年の2022年4月に文一総合出版から出版された「よくわかる佐渡ジオパーク　自然とひとの暮らし」（相田（遠藤）満久ほか，佐渡ジオパーク推進協議会）では、佐渡島の地形地質と人々の暮らしの関わりや動植物の生態が紹介され、佐渡ジオパークを身近に感じられる本の出版ができました。古生物に疎い者にとっては、化石の写真が多く掲載されており、化石の種類や地層の時代がすぐにわかるので非常に便利です。また、化石の名称がわかるだけでなく、当時の生息環境のことまで書かれており、その化石が産出する意味を知ることができます。その後、2023年には学校用副読本の作成・出版がなされており、児童生徒が学校で活用できることを目指したこれらの取り組みは、他のジオパークより進んでいると思います。ジオパークの目的の1つは、「歴史と現代社会における地域の地質遺産の重要性について意識を高めることで、地域住民が自分たちの地域に誇りを持ち、地域と住民の一体感を強化する」ことです。学校とジオパークが連携することは非常に有益で、地元の

沢崎の枕状溶岩

自然と学術的背景を学べる機会を作ることは、地域を支える人材の育成や、自然科学を探究する精神を培うことにつながると思います。

私が新潟大学教育学部に赴任したのは1991年4月で、もともとマグマが生成する構造場とマグマの化学組成の研究を行っており、日本海の形成に関係するマグマの主成分・微量成分化学組成や同位体化学組成の変化を中心に研究をしていました。博士論文はやはり日本海の形成に関連して活動した中国地方のアルカリ玄武岩の成因をまとめたものです。新潟大学に赴任してからは、佐渡島小木半島、新潟市南部の角田―弥彦山塊をはじめとする中期中新世の火山岩類に興味を持ち研究してきました。小木半島の水中火山岩類の地質と岩石については、新潟大学理学部の故茅原先生や故島津先生、そして小木団体研究グループにより研究され、その成果が公表されていましたが、その地層の露出の良さ、また弥彦火山岩類と違い新鮮なガラスが残存することから、私はマグマの発泡と爆発的噴火のメカニズムを、海底の玄武岩質火山の地層から研究したいという気持ちを持ち、1994年頃から研究室の学生と小木半島に通いはじめました。その際に、段丘地形、海食洞の岩屋洞窟、宿根木の断層と横井戸、火山砕屑岩の切り出しや隧道の作成、室としての活用、また千石船など、他の地域では見ることができない地形・地質と生活の歴史に触れることができました。景色も素晴らしく、段丘地形に作られた稲田の美しさ、岩脈の侵食によってできる深い入江の海の色、沢崎灯台から眺める海や温泉から眺める対岸の灯りなど、心に残るものばかりです。秋の祭りや鼓童の太鼓フェスティバルもぜひ多くの人に体験してほしいものです。

小木半島だけでなく、佐渡島の地形・地質と自然、景観は素晴らしいものです。火山のような派手さはありませんが、より多くの人に来てもらい、その魅力を知ってほしいと願っています。今後の佐渡ジオパークの役割は大きく、10周年を契機に、佐渡市一丸となって今後さらに羽ばたいていただきたいと思います。

野外実習　鷹ノ巣トンネルにて

佐渡島の自然や文化に魅せられて

佐渡ジオパーク推進協議会顧問・元佐渡市教育委員会教育長
渡邉剛忠

佐渡島に生まれ、幼少のころから自然豊かな環境の中で元気に育った。よく手伝いもした。春の田植えでは、オタマジャクシやカエル、メダカ、ドジョウ、ナマズなどによく出会った。周囲にヨシが生い茂った谷地田（深田）では、あぜ道の巣で抱卵している鴨や、ふ化したばかりの鴨の親子の行列に出会った。

「佐渡ジオパーク」の取り組みが始まったころ、佐渡島の固有種とされた「サドガエル」が発見され、これまで田んぼで見かけたカエルの常識とは違った生態を持つカエルの発見に驚いた。少年時代に谷地田で見かけたカエルのイメージに重なり感動した。

佐渡島の「八景」の一つに「長木八景」があり、その１景に「谷地の落雁」がある。少年の頃出会った谷地田の鴨に想いを膨らませ、夕方ヨシの中の田んぼに帰る雁の絵を描いてみたいと思う。

1964 年（昭 39）初めての赴任校が県立相川高等学校であった。その年の 6 月 16 日午後 1 時過ぎ粟島南方沖 40㎞を震源地とする、M 7.5 の新潟地震が発生した。

地震を機に、顧問をしていた化学部の活動は、佐渡の大地や自然と私たちの生活とのかかわりについて取り組んでみようということになった。早速、沢根町出身の化学の先生の家で使用しているヤカンによく付着するというザラザラした褐色の物質を調べた。地層に含まれている貝化石や有孔虫などの成分（炭酸カルシウムなど）が地下水に溶解し、熱することによって析出、沈殿したものであることを知った。また、海底火山でできた小木半島の地下水（横井戸の水や湧水）のアルカリ度やＰＨ値が高く、島内の他の地域とは違っていて、部員は郷土の大地の成り立ちや、横井戸の水で生活し、田んぼ作りをしている半島の皆さんの知恵に驚き、その努力に感動した。

海府南部エリア　跳坂から山体崩壊の知行山・関岬を眺む

「佐渡島から見つかる化石に含まれている有機物を分析してみないか？」と斎藤良二郎先生から問い合わせがあり、興味があることをお伝えした。さっそく新潟大学に来られたばかりの小林巌雄先生や東京教育大学の大森昌衛先生を紹介いただいた。県教育委員会に内地留学を申請、認められ、大森研究室で化石中のアミノ酸分析法や古生物学の基礎実験などについて学んだ。骨や貝化石の微細構造や続成作用など、自然の仕組みや奥深さを学んだ貴重な機会になり、生徒の指導に役立てたいと思った。

佐渡博物館研究報告　第６集　「佐渡島の地質（その１）」が 1971 年（昭 46）に発刊されている。菊地勘左衛門館長と同館地質部長斎藤良二郎先生の崇高の想いが詰まった報告集が続いて発行された。この想いは同館が佐渡市に移管後も継続されている。

化石に含まれる有機物の分析の取り組みは、大地や自然の奥深さを学ぶと共に先達の皆様に出会うことのできた貴重な経験となった。

退職したら挑戦してみたいことの一つに、かつて調査・研究に度々訪れた島内の魅力的な大地や自然の景観を墨絵や水彩画に描くことがあった。日本地質百選に選ばれた大地やミシュランガイドの星付きの魅力ある眺望をしっかり記憶に残しておきたいと思ったからである。よくスケッチに出かけた。

佐渡島が一市になった２年後の 2006 年（平 18）から佐渡市教育委員会に４年籍を置き、世界文化遺産登録の実現に向けて職員と共に取り組んだ。2010 年（平 22）「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」がユネスコの暫定リストに掲載された。

また、そのころ髙野市長と、日本の縮図と言われる佐渡島の貴重で多様な自然や文化の資産を保全し、活用する取り組みとして、糸魚川市が世界に先駆けて取り組みを進めていた「ジオパーク」構想について検討、職員と共に訪問して学んだ。

2009 年（平 21）「日本ジオパーク連絡協議会」に会員として参加、2010 年（平 22）市教育委員会佐渡学センター内にジオパーク準備室が設置された。翌年、市教育委員会にジオパーク推進室が設置され、佐渡ジオパーク推進協議会が設立された。取り組みが進み 2013 年（平 25）には日本ジオパークネットワークの会員として認定（日本認定）され、現在に至っている。

今年度 10 周年を迎えた。これまでを振り返り、さらに解りやすい、楽しい「佐渡ジオパーク」の展開を目指して一層の発展を願うものである。

佐渡ジオパークで注目される小木半島　神子岩（水彩画）

推進室設立までの思い出
～手作りのジオパークづくりを基本にスタート～

佐渡ジオパーク推進協議会調査研究部会副部会長・前佐渡市ジオパーク推進室推進指導員
池田雄彦

教職退職後に佐渡伝統文化研究所指導員として勤め、４年目の2009年４月に、研究所機能の拡充・強化に伴い、歴史・文化に自然を加え「佐渡伝統文化研究所」の名称が「佐渡学センター」に改称されました。年度初め、渡邉剛忠教育長から「世界遺産推進室が教育委員会から市長部局に移ったので、前々から糸魚川市から呼びかけのあったジオパークに取り組みたい。佐渡が日本および世界ジオパークの認定を得られるよう基本計画を作成するように」と指示されました。センター内で唯一理系のため、ジオパークと関わることになる始まりでした。早々に、糸魚川ジオパークを訪問し、現地視察、事務局の指導助言を得て、私なりに「佐渡の大地の売り」を考えた佐渡ジオパーク基本構想案と世界ジオパーク登録までのグランドデザイン案などを作成しました。渡邉教育長と一緒に佐渡の地質に詳しい新潟大学名誉教授小林巌雄先生の指導を受けました。小林先生は、基本構想案の地質部分を赤字で埋まるほど加筆修正、島の成り立ちを３億年のストーリーとしてまとめてくださいました。私案は、佐渡が自慢できる地質アラカルト集で、ストーリー性に欠けたものと痛感しました。このときから、ストーリー性を常に意識するようになりました。この基本構想をもとに説明資料やプレゼンを作成、市長レクと本庁関係者にレクを行いました。髙野市長は「世界を目指す佐渡の３資産（３つの宝物）」の一つとして、世界ジオパークを目指す」と決意されました。この時点では、佐渡市は世界ジオパークを目指していたのです。

2010年、佐渡学センター長に渡邉剛忠先生が着任、佐渡学センター

市民講座　ドンデン高原にて

内にジオパーク準備室が立ち上がり、推進指導員に神蔵勝明先生をお迎えしました。そして指導顧問を小林巌雄先生にお願いし、日本ジオパーク認定を目指す活動が本格的にスタートしました。日本ジオパークの申請に、国のある独立行政法人から「申請書を作成しましょうか？」と声かけがありましたが、小林先生が「いくら立派なものでも外部の人が作成したものは長続きしません。時間がかかっても地元の人が手作りすることが大切」と教えられました。この考えが佐渡ジオパークの基本となっています。小林先生には、この年以降体調を崩されるまで、毎月１～２回来島し、地質調査、資料作成の指導をしていただきました。神蔵先生の猛烈ともいえる情熱と小林先生の佐渡の大地に対する愛情で、調査や資料作成も急速に進み、準備室の立ち上げ初年度から佐渡ジオパークを支える人づくり（ガイド養成）講座もスタートしました。作成資料は、常に小林・渡邉・神蔵・池田の４人が原稿を読み合わせながら校正に当たりましたので、大変勉強になりました。マップなどの資料作成の一部を執筆しましたが、小林先生は卒論を指導されるような丁寧で繊細な校正でした。時には、前回先生自身が修正された部分を直すこともあり、納得するまで校正を続ける徹底ぶりでした。メモから、私が同席し指導いただいた延べ日数は、121 日にもなります。小林先生の宿泊時の夜食会は定例となり、飲んでもジオパークのことだけだったと懐かしく思い出されます。翌 2011 年、ジオパーク推進室が設置され、同時にジオパーク推進協議会が立ち上がりました。2013 年の初夏、日本ジオパークの審査があり、神蔵先生と一緒に審査員の前でプレゼンしたことが思い出されます。同年秋、苦労が報われ念願の日本ジオパークに認定されホッとしました。指導員として 2016 年 3 月引退、それ以降は協議会調査研究部会員として佐渡ジオパークとかかわってきましたので、14 年間のお付き合いとなります。

ジオサイト調査　椿尾にて

佐渡ジオパーク 10周年に寄せて

佐渡ジオパーク推進協議会会員・NACS―J自然観察指導員 中川 清太郎

自分の一生は、この畑の石ころ拾い出しに終始するのだろうかと毎回思って家庭菜園にも勤しみ、今では石ころもほぼ無くなり無農薬無化学肥料で長生きを試みている。標高50ｍほどの国中の台地。角の無い大石小石の手掘りの井戸は、釣瓶（つるべ）で汲み上げていた時代の我が家の井戸水は近所では評判で、大人や学童もよく立ち寄った。佐渡島は平均１年に１㎜の隆起とジオパーク推進室の相田満久先生に教えられて、５万年前頃の礫浜海岸が私の生活基盤であることを知り、今更ながらに納得できた。

60年ほど前の農業高校での３年間は、小木半島の地質調査に１ｔトラックのホロを付けた荷台に乗り、日曜毎に枕状溶岩の風化土壌のサンプリングに通った。冬季はサンプルの分析。その目的は、アルカリ土壌の分布とその中和点を求めること。白木三ツ屋集落の開田が国内では例の無いアルカリ性の水田であった。開田２年目に収量ほぼ皆無。稲作に適した土壌酸度に中和するための作業を行い、その甲斐有ってその年の収量は平年作を取り戻した。小木半島の枕状溶岩の風化土壌には、ＰＨ７を超える所があることも判明した。耕作地としては国内唯一であると聞いていた。

イギリスのキュー王立植物園のプラントハンター２名とＢＢＣの動画カメラマンの３名１チームが佐渡島へ樹木の種子を集めに来島した。彼らは実を拾う事は一切せず、その木に実っているものを収穫し、チェックシートに種毎にデー

神子岩を望む沢崎灯台にて…（2014.6.15）　photo by 門口

タを記録していた。彼等の合言葉は168種であった。それは他のチームも含め過去の世界記録は168種であり、今回佐渡ではそれを1種でも上回る成果を目標とした値であると。100粒収穫出来たとすると50粒は後々の研究用に永久凍結保存、他の50粒は発芽させ園内の日本庭園に植栽し、研究また交換種苗にも利用するとのことであった。本間航介先生（新潟大学農学部助教）と5名で、昨日は島の南へ、今日は北へ、明日は山へとポイントを変え、2003.10.30　彼らは帰路についた。

佐渡での成果は200種を超えていた。この時のチームの笑顔は忘れるはずもない。佐渡の豊かさの一面を強く実感出来た心の大安であった。この世界一の好記録は、この佐渡島のジオパークとしての多様性を示すものである。佐渡では四季がはっきりしており、実りがほぼ秋に集中し、植物の自生環境が多様で、小さな県や小国にも劣らなく、沖縄本島をもしのぐ国内島嶼中最多の自生植物種である。キュー王立植物園の他、来島の午後半日、妙見山へ案内したイギリスの若い男性も大感激して我が家に泊まった。イギリス全樹種にも当たる42種を収穫出来たから納豆まで平らげた。ネーデルランド（オランダ）のライデン大学植物園の副園長、カールテイネさんも大喜びであった。

20～30年前になるだろうか。既知のものに似てはいるのだが、合致しない2種類の植物が気になっていた。何名かの先生方に現地でも見て頂いたものの、「佐渡のはねえー？」の答えばかりであった。門田裕一先生（国立科学博物館）に2016年の夏と秋に、その自生地を訪れて頂くことが出来た。門田先生は両種共、一見するなり「これは新種です。世界にこの様なものは他には無い」と速断されたのにはびっくり。佐渡島からの新種であり、佐渡島の特産種として門田先生により「植物研究雑誌」2017（英文）に発表された。両種ともキク科の草本 *Parasenecio sadoensis Kadota*　サドカニコウモリ、*Saussurea nakagawae Kadota*　サドヒゴタイである。

地球儀では有ったり無かったりの佐渡島でありながら、ジオパークの観点から俯瞰し、そして掘り下げれば計り知れない自然の豊かさ、変化に富む大地、そこに根ざし季節とともに静かに変化する緑豊かな佐渡が「ふるさと」であることは本当に有難いのだが、美しかった海岸線、清流の砂防ダム、落差工などで失われた風景、生態系はあまりにも多いと思う。多自然型工法や潜堤護岸などのように、新しい技術で代え難い自然であるこの島を取り戻したい。10周年を節目とし、次の時代を見すえた礎であってほしい。

ジオパーク推進協議会で日々取り組んでおられる島民への普及活動が実を結んだとき、島民自らより深い愛情で佐渡を大切にする心が芽生えて来ていることは心強く、自分も遅蒔きながら関心を持ち続けたいと思っているところですので、今後もどうぞよろしくお願い致します。

金北山にて…（2014.7.19）　photo by 門口

佐渡ジオパーク誕生10周年、まことにおめでとうございます！

元佐渡ジオパーク推進協議会会員・初代佐渡ジオパークガイド協会会長　岩立　恒

時の流れは大地にとっても人間にとっても同じでしょうが変化の速度は大違いなので「たった10年で喜ぶなんて…」と大地は笑うかも知れません。しかし、学生時代に学んだことが今どう活きているかを同窓会でとりとめもなく語り合うのは楽しく意義あるように、人間には過去を振り返ることで今の立ち位置が明るい未来に向いているのかを確認し修正する能力があるのです。

ひょんなことから佐渡ジオパークガイド協会の初代会長の任を負った私ですが設立当初を振り返り稿を起こすよう求められましたので、お目汚しですが大地の営み・恵みと触れ合う楽しさを共感していただけたら幸いです。

生まれ育ちは島外の私ですが実家が佐渡にある女性と結婚したことで毎年7～10日間を佐渡で過ごし「あれは何？」、「なぜここにこれが？」などの不思議を見つけるたびに、金井町図書館や畑野町の本屋さんのお力添えで佐渡の知識がまるで地層のように積み重なり膨らんでいきました。

『得た知識は己だけのものとせず広く分け与えてこそその価値は輝く』という言葉がありますが、知れば知るほど佐渡を語りたくなる病に取り憑かれた私はついに2006年居を佐渡に移し「全国に佐渡を広める活動をしている団体があれば参加したい」と市役所に相談したところ『日本風景街道・佐渡國しま海道』の計良武彦様から参加のお許しが戴け、それがきっかけで『相川ふれあいガイド』や『小木ふれあいガイド』の活動にも参加させていただきました。

当時、世界遺産登録を目指す活動が相川で進んでいて新潟県で最初に「世界」の冠を被るのは佐渡だと思い込んでいた私は2009年に糸魚川が日本で最初の「世界ジオパーク」に認定され、先を越されたショックを感じながらも『ジオパーク』という表現に興味が湧き、翌2010年に佐渡市が開設したジオを学ぶ市民講座の第一期受講生となりました。初級講座～中級講座～ガイド認定講座と年ごとに進み、佐渡も「世界ジオパーク」認定を目指すためには「日本ジオパークネットワーク」への加入審査を受けることが必要で、2012年12月にジャンケンで負けた私が委員長となり『ガイド協会設立準備委員会』を組織し半年後の2013年6月に認定ガイド21名で「佐渡ジオパークガイド協会」が立ち上がりました。協会の会長は委員会とは違い対外活動の上でも佐渡に生まれ育った人であるべきだと私は考えていましたが、ガイドの実践経験者の多くが多忙を理由に固辞したため、当時のジオパーク推進室長野口敏樹様（故人）にもご理解いただき二期目からは児玉功様に引き継いで戴くことを前提に私が初代会長に就いてわずか二ヶ月後、三名の審査員をお迎えして小木中学校のガイド部員を含め私たちは二日間にわたる厳しい

実地審査を受けありがたいことに佐渡は同年9月24日「日本ジオパーク」の仲間入りを認められました。

地質や地形、地層というのは大地の営みや環境の変化をしっかり語ってくれるものなので難しく考えず「地球をテーマパークのように見直して大地と共に楽しく長く生きましょう」というお誘いの場が『ジオパーク』だと私は思っています。そんな親近感を抱くきっかけとして、この記念誌がジオパーク関係者のみならず多くの方々の目にとまり学ぶ仲間がふえ、佐渡ジオパークのますますの発展とグローカリゼーションの広がりに寄与できるようお祈りします。

立岩（人面岩）

熱い議論を経て誕生した佐渡ジオパークガイド協会

元佐渡ジオパーク推進協議会会員・前佐渡ジオパークガイド協会会長　児玉　功

佐渡ジオパーク日本認定10周年併せて佐渡ジオパークガイド協会設立10周年おめでとうございます。あれから10数年の月日が経過したのかと思うと感慨も一入です。わたしは平成23年のジオパーク市民講座に参加して、佐渡の自然について興味深い話をみっちり学習することができました。「金北山は死火山でないこと」「佐渡は大陸にくっついていた。それが地殻変動で分かれて海の底深い時代、隆起の時代を経て今日に至る。」という神蔵先生の講義を受けたら、もうどこにその痕跡があるのか考えると毎回の現地研修は楽しいものでした。ちょうどその頃から私の目に変化が起きてきました。佐渡の石ころ、草木、岩、川、海、山々、そして空までが輝きだしたのです。

翌年になると、佐渡がジオパークの日本認定を目指したい。ついては、ジオパークガイドを養成しますので意欲あるものはガイド養成講座に集まってもらいたいと呼びかけがありました。20名弱ぐらいのメンバーが受講しました。講師はふれあいガイドなどで活躍していた小澤三四郎氏でした。「ガイド体験」「救急法」など6回くらいの研修でした。受講しているとガイドの楽しさを感ずるようになりました。

事務局はその機を逃さず「ガイド組織に関する意向調査」を行い、ジオパークガイド養成講座受講生の中から、佐渡ジオパークガイド協会結成に向けての準備委員の選定を提案されました。養成講座から8名ぐらいのメンバーが選ばれました。

そのメンバーで「ガイドとはどうあるべきか」「どういうガイドがお客様に喜ばれるの」「ガイドが最低身に着けること」「ガイド料はどうするの」「ガイドをまとめる組織は」などさまざまな協議が行われました。思い出すのは、事務局の高橋室長、宇治主任、市橋学芸員の出席のもと窓のない煙ったような両津郷土博物館講堂で口角泡を飛ばして議論したことでした。

そのかいもあって、平成25年6月16日に佐渡ジオパークガイド協会の設立総会（会場両津郷土博物館講堂）を迎えることができました。ガイド組織準備検討委員会の経過が報告され、協会規約採択、岩立会長以下役員選出、予算などが審議されました。

私は会計担当で初代岩立恒会長と一緒に役員をさせていただきました。その後、平成27年2月から会長職を岩立氏から微力ながら引き継ぎました。

この頃、年間37回、延べ907人のお客様にガイドの活動をするようになり、実体験にもとづいた意見が寄せられるようになりました。「お客様に喜ばれるガイド活動とは」「ガイドとしてジオパークを普及するには」といったことが大きな課題として提案されました。会の仲間の意

見として、ガイド自身の生き様をお客様にお話してはどうか。友人とハイキングした時に談笑しながらのお話のようにガイドしようという結論になりました。また、佐渡のみなさんへの啓発活動に力を入れようということで集落の研修に力を入れてきました。

ここでガイドの知識の引き出しに差ができ始めてきました。そこでガイド自身に主体的に学習してもらうために「わたしのお薦めコース」活動を年間計画で進めてきました。自分の住んでいる地域とかガイドの案内したい地域を調査、研究し、ガイド同士で発表し合う活動を行いました。本当にみんなが嬉々として取組んでくださいましたし、みんなに聞かせてやりたいという意欲ありありの活動でした。

また、環境保護にも目を向けようと会員から呼びかけがありました。とってつけたような活動ではなく、自分たちがガイドするところを清掃し、お客さんに気持ちよく訪ねていただき、ガイドとして胸を張って案内する活動も大きなものでした。

今となっては故人となってしまいましたが野口室長には歴史の分野での相談やご指導、渡邉剛忠先生には個人的に相談に乗っていただき、なんとか２期・３期を全うすることができました。本当に多くの会員とご指導くださった各分野の専門家の皆様に感謝し、今後益々の佐渡ジオパークガイド協会の活動の発展をお祈りします。

これが枕状溶岩でできた「たけのこ岩」です

佐渡ジオパークガイド協会も10周年

佐渡ジオパーク推進協議会会員・佐渡ジオパークガイド協会会長　池　善　世

佐渡ジオパーク日本認定１０周年を迎え、お慶び申し上げます。当ガイド協会も同年６月に立ち上り、１０周年を迎えました。

ジオパークを多くの人が知り、楽しむためにはその理解者とジオパークガイドが必要です。そして、当ガイド協会はジオパークガイドとジオパークに関心をもつ人々によって構成されています。いわば、ガイドとサポーターが一緒になってスタートした組織です。楽しく有意義で安全なガイドのためのガイド研修や佐渡の価値を堪能する地質から動植物、歴史・民俗など多様な学習を目で楽しみながら一つ一つ積み重ねています。

私は、認定時は中級講座生で翌年暮れに当ガイド協会に入会しました。当時は植物、歴史、民俗、地質などを何らかの活動されていた人やガイドをされていた人達がジオ＋パークの視点や知識を加えることで世界が広がっていく様子、「熱」が感じられました。その分、会員の思いもいろいろあって当協会の運営は大変で、役員会も夜１０時を過ぎることが常態化していました。

この間、全国的にもガイド内容・技術は進化・整理が進み、高度化しました。「期待されるジオガイド像」、インタープリテーション、SDGs 等の視点が組み込まれました。島内でもモデルコースがつくられ、PR とともにガイド内容の高位平準化を進めています。島内外の教師を交えた修学旅行用や中部ブロック

一同、自力で漕いだ海からの光景に感動

大会で検討したコースが協議会 HP にアップ中です。例として、相川地区では金山第５駐車場から青盤脈の規模を実感しながら金銀鉱石のでき方をご理解頂き、石磨まで話を進めます。小木地区では千石船の寄港地になったことやたらい舟の活用と海底火山の関係をひもときます。その他、国中平野・加茂湖、両津ミニ（湊地区）、大野亀・二ツ亀などきれいで有意義なコースを楽しんでいただけると思います。

近年、ガイドの自主研修会への参加者が固定化の傾向があります。認定ガイドの実稼働数も厳しくなっています。新型コロナウイルス感染対策によって活動が制限されたこと、仕事を持っている方も多く、会員の関わり方も多様になってきました。しかし、ガイド養成講座の再開で準ガイドが増え、今後の活躍が期待されます。今年の総会には多数の出席があり、喜びとともに魅力ある活動が求められることを実感しています。

１０年が経過すると、人も入れ替わり多様な入会動機が見られます。年月とともに目新しさも徐々に感じられなくなります。ここに１０周年を迎える意義があると思います。佐渡は広く多様です。私はガイド時の下見や研修会でよく発見があります。まだ見ていない場所もいくつかあります。日本海や日本列島のでき方、佐渡の新しい層序の考え方や佐渡各地の生い立ちなど知りたいこともたくさんあります。

そこで、佐渡の魅力、素晴らしいと感じる場所や事柄はなにかをあらためて確認し、それを交換して共通認識に繋げること。更に、どこを見たいか、何を知りたいか考えること。そして、個人としてもガイド協会としても動きにつなげることによって佐渡がもっと素晴らしいと感じることが出来ると思います。私も一過性のイベントで終わらないように会員と協力して今後に繋げるよう進めています。今後ともよろしくお願いします。

島とは思えない広い国中平野

佐渡ジオパークを振り返るとき

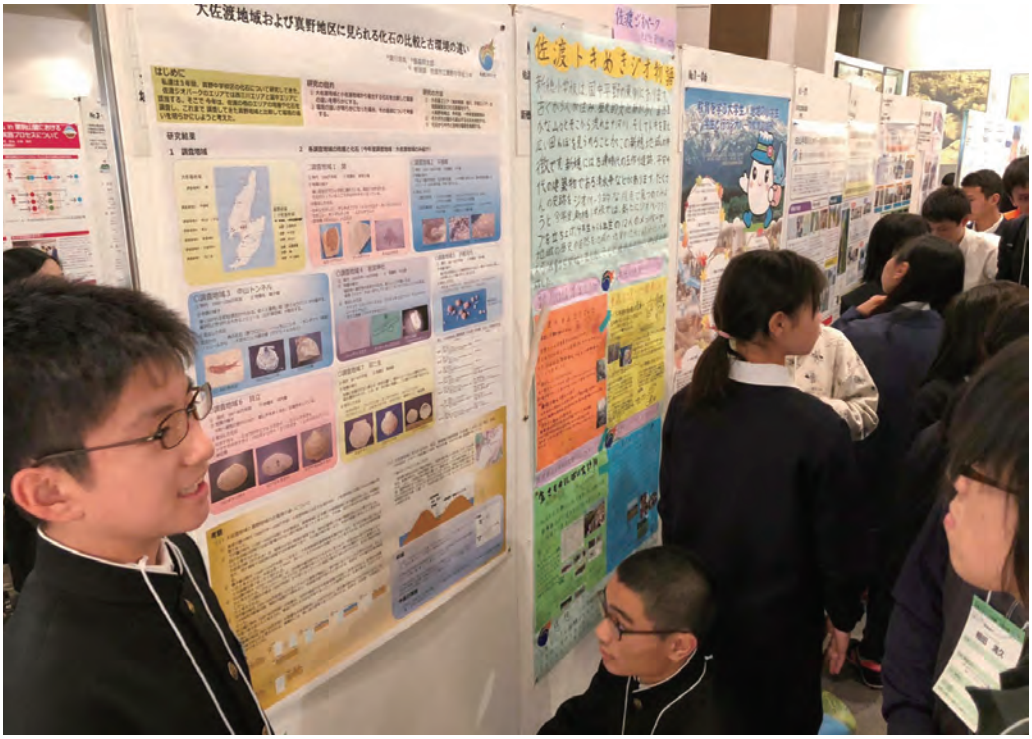
佐渡市ジオパーク推進室推進指導員　相田満久

佐渡ジオパークが認定10周年を迎えました。準備段階を含めるとプラス2年くらいになるのでしょうか。私は現在、佐渡ジオパークの推進指導員をやっておりますが、初代推進指導員の神蔵勝明先生、私の大学時代の指導教官だった小林巌雄先生、公私共にご指導いただいた顧問の渡邉剛忠先生、前推進指導員の池田雄彦先生には大変お世話になりました。先生方と共に佐渡ジオパークの推進ができたことが私にとっての誇りであり、ジオパークを語る中での自慢であります。

準備段階の2年間は、ジオサイトの予備調査を進めた時期でありました。佐渡の各地を巡り、ジオサイトとして活用できるか、どのような価値を持つのかを調査して回りました。このときの時間がとても懐かしく、佐渡ジオパーク立ち上げ期を振り返るとき先生方と一緒に調査したあの頃の情景が鮮明に思い出されます。

その後、程なくしてジオサイトを活用した市民講座が開講されました。定員を上回るたくさんの市民の皆様が受講され、ジオの魅力を楽しそうに体感していました。これまでのきれいな景色を見るだけの観光ではなく、大地が動くという視点で目の前の風景や自然の成り立ちを考える講座は新鮮な感覚だったのではないでしょうか。当時の講師は神蔵先生です。熱く語る姿に魅了されました。蛇足ながら私も講座の一部を講師として担当させてもらい、参加者のもっと知りたいという好奇心を感じながら、自分自身も伝えることの喜びを実感していました。

私の前職は中学校の理科教諭です。52歳で退職、現職に従事しました。これまでのキャリアを生かし、ジオパークの事業では教育関係、特に出前授業や



男鹿半島・大潟全国大会

内海府小・中学校ジオクラブ

クラブ活動に取り組んできました。特に少人数で活動できるクラブは、機動力があり、テーマを継続的に調査してストーリーを組み立てることができました。これまでクラブ活動を実施した学校は、新穂小学校、真野小学校、両津小学校、加茂小学校、金泉小学校、前浜小学校、小木小学校、二宮小学校、内海府小・中学校、真野中学校の 10 校です。これらのクラブ実施校では、ジオパークの全国大会で発表した学校もありました。それは H28 年度：伊豆半島大会：真野中学校、H29 年度：男鹿半島・大潟大会：新穂小学校、真野中学校、H30 年度：アポイ岳大会：新穂小学校、R1 年度：おおいた大会：真野小学校、新穂小学校、加茂小学校、R4 年度：白山手取川大会：真野小学校、両津小学校、小木小学校です。多くの児童、引率の先生方と共に自校のジオ的な魅力、ひいては佐渡ジオパークの魅力を全国のジオパークの関係者、地域の方々に広めてきました。これらの活動に対して、現地において市長や教育長から激励や賞賛の言葉をいただいたりしました。子供たちにとって達成感のある大きな経験になったことでしょう。全国大会参加者の中には、この時の経験から自分の進路を地球科学の研究に定め、現在大学にて修学に励んでいる学生もいます。

10 周年という大きな節目に当たり、私個人が思うジオパークの目的は「佐渡の人が佐渡を好きになること、佐渡を出た人が佐渡を懐かしみ戻ってきたいと思える場所になること（郷土愛の醸成）」これが一番の目標、次いで「佐渡のポテンシャルが高いことを世に知らしめること（魅力の発信）」、「島外の人に佐渡の魅力を見てみたいと思わせること（交流の促進）」と捉えています。このような郷土愛の醸成と魅力の発信、交流の促進を推進できるコンテンツがジオパークだと考えます。これからの佐渡ジオパークが大きく飛躍し、佐渡の重要な役割が担える存在であることを切に願うものです。

新穂小学校ジオクラブ

佐渡ジオパーク　10年の歩み

年	月	佐渡ジオパーク	佐渡市	その他 ■日本・世界ジオパークネットワーク ■発行物等
平成21年（2009年）	5月			■日本ジオパークネットワーク設立
平成22年（2010年）	3月	■佐渡ジオパークグランドデザイン作成		
	4月		**■ジオパーク準備室設置（教育委員会佐渡学センター内）** 専門員（嘱託職員）採用	
	6月		■「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」の名称で世界遺産暫定一覧表に記載	
			■第1期佐渡ジオパーク市民講座開講（以降、毎年開講）	
	8月	**■日本ジオパークネットワーク加盟（準会員）**		
平成23年（2011年）	4月		**■ジオパーク推進室設置（教育委員会佐渡学センター内）**	
	5月	**■佐渡ジオパーク推進協議会設立** 佐渡ジオパーク推進協議会設立総会		
		■佐渡ジオパーク推進協議会設立記念講演 「ジオパークの推進と佐渡の魅力について」講師：小泉武栄様 「ジオパーク推進による地域活性化について」講師：岩崎良之様		
	6月		■世界農業遺産（GIAHS）に先進国として初めて能登半島と一緒に認定	
	9月	■第2回日本ジオパークネットワーク全国大会洞爺湖大会（北海道）参加（以降、毎年参加）		
平成24年（2012年）	2月	■シンポジウム「私のオススメ！佐渡ジオパーク」講師：渡辺真人様		
	5月	■第5回ユネスコ国際会議（島原半島ユネスコ世界ジオパーク／長崎県）参加		
		■日本地球惑星科学連合大会（幕張）参加（以降、毎年参加）		
	7月	■公式ロゴマーク使用ガイドライン策定		
	10月	**■佐渡ジオパーク基本構想策定**		
		■講演会「ジオパークで地域を元気に！」講師：今井ひろこ様		
	12月	■第1期佐渡ジオパークガイド養成講座開講（以降、毎年開講）		
平成25年（2013年）	2月	**■佐渡ジオパーク基本計画（アクションプラン）策定**		
	3月			■『佐渡の自然史』　第１号（創刊号）発行
	4月	■日本ジオパークネットワーク加盟申請書提出		
	5月	■日本ジオパークネットワーク加盟申請公開プレゼンテーション参加		
		■ジオパーク講演会「日本・世界ジオパークに向けた自治体と大学との連携」講師：松岡篤様		
	6月	**■佐渡ジオパークガイド協会設立**		■『佐渡島の自然（地質編）－ジオパーク解説書－』発行
	7～8月	■日本ジオパーク委員会現地審査実施		

年	月	佐渡ジオパーク	佐渡市	その他 ■日本・世界ジオパークネットワーク ■発行物等
平成25年（2013年）	9月	■**日本ジオパークネットワーク加盟（会員）** 日本ジオパーク認定証授与（JGN隠岐大会）		
		■第3回APGN（済州島ユネスコ世界ジオパーク／韓国）参加		
	11月	■日本ジオパーク認定記念講演会「ジオパークが目指すもの」講師：尾池和夫様		
平成26年（2014年）	2月	■中部（北信越）ブロック事務局会議（恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク／福井県）参加		
	3月	■日本ジオパーク審査結果報告書への回答書提出		■『佐渡の自然史』 第２号発行
	5月	■公式ロゴマーク使用ガイドライン更新		
	10月	■新潟圏域ジオパーク意見交換会（佐渡市）開催（以降、毎年開催）		
	11月		■3資産シンポジウム開催 パネラー：島津光夫様・井澤英二様・永田明様	
		■伊豆半島ジオパーク（静岡県）大巡検		
平成27年（2015年）	2月	■ジオパークシンポジウム「文化財が伝えるもの」講師：桂雄三様		
		■ジオ女子パネルディスカッション「佐渡ジオパークの楽しみ方」 パネラー：長谷川亜耶様・青山菊代様・山口佳代様ほか		
	3月	■佐渡ジオパークガイド更新研修会開催（以降、毎年開催）		■『佐渡の自然史』 第３号発行
		■中部（北信越）ブロック事務局会議（苗場山麓ジオパーク）参加		
	11月	■中部ブロック大会（白山手取川ジオパーク／石川県）参加 （以降、毎年参加）		■ジオパークユネスコ正式事業化
平成28年（2016年）	3月		■済州島ジオパーク（韓国）視察	■『佐渡の自然史』 第４号発行
	4月	■小中学校ジオパーククラブ開講 （以降、毎年開講）	■ジオパーク推進室専門員増員	
	6月	■第2回ジオパークガイドフォーラム参加		
	7月	■ジオパーク新潟国際フォーラム（朱鷺メッセ）開催 ジオパーク新潟国際フォーラム（朱鷺メッセ）		
	9月	■第7回ユネスコ国際会議（イングリッシュ リビエラ世界ジオパーク／イギリス）参加		
	11月	■ジオパークシンポジウム「伝えよう！佐渡ジオパークの魅力」講師：宮島 宏様・豊岡明子様・ 児玉功様		
平成29年（2017年）	3月	■ジオカフェ開催　講師：柚洞一央様・白井孝明様		■『佐渡島の自然（地質編）－ジオパーク解説書－』改訂版発行 ■『佐渡の自然史』 第５号発行
	4月		■自然探究講座開講	
	8月	■大ワークショップ「地球に遊んでもらいましょう！」講師：大岩根尚様		
	11月	■日本ジオパーク再認定現地審査実施		
	12月	■**日本ジオパーク条件付再認定**		

年	月	佐渡ジオパーク	佐渡市	その他 ■日本・世界ジオパークネットワーク ■発行物等
平成30年（2018年）	1月	■日本ジオパーク委員会審査結果報告書受領		
	3月	■ジオパークシンポジウム「条件付再認定が地域に与えた効果」講師：竹之内耕様 「お菓子な景色で大地を楽しもう！」講師：鈴木美智子様		
	3月	■新潟圏域ジオパーク意見交換会（佐渡市）開催		
	5月	■再認定審査指摘事項に対する回答書提出		
	9月	■ジオサイト設定総合計画策定		
	10月	■三笠ジオパーク視察		
平成31年（2019年）	2月	■拠点施設「佐渡ジオパークセンター」設置		
		■ジオパークシンポジウム「真冬の楽校」講師：平田和彦様ほか		
	3月			■『佐渡の自然史』　第６号発行
	4月	**■第2次佐渡ジオパーク基本計画（アクションプラン）策定**		
		■「佐渡ジオパークコーナー」設置（佐渡汽船両津港ターミナル内）		
令和元年（2019年）	8月	■ジオサイト保護保全管理計画策定		
	10月	■日本ジオパーク再認定現地審査実施		
	11月	■中部ブロック大会（佐渡市）開催		
	12月	**■日本ジオパーク再認定**		
令和2年（2020年）	1月	■日本ジオパーク委員会審査結果報告書受領		
	2月	■佐渡ジオパークガイド研修会開催（以降、定期的に開催）		
	3月	■再認定審査の指摘事項に対する回答書提出（アクションプラン改正）		
		■看板の分類や役割に関するガイドライン策定		
	4月	■「ぶら～り　ジオパークだっちゃ！」　放送開始（以降、毎月放送）		
	10月	■佐渡ジオパーク食認定基準制定		
令和3年（2021年）	3月	■新潟圏域ガイド意見交換会（佐渡市）開催		■佐渡ジオパークオリジナル映像制作
	10月		■世界農業遺産（GIAHS）認定10周年記念フォーラム開催	
	12月		■「佐渡島の金山」世界文化遺産国内推薦候補に選定	
令和4年（2022年）	3月			■入門書「よくわかる佐渡ジオパーク」制作 ■「ジオパークガイドブック」制作 ■『佐渡の自然史』　第7号発行
	5月		■SDGｓ未来都市選定 ■自治体SDGｓモデル事業選定	
	8月	■ジオパーク講演会「世界最古のツチクジラ化石が語ること」講師：甲能直樹様・川谷文子様ほか		
	9月	■新種ツチクジラ和名発表会開催 （「サドムカシツチクジラ」に決定）		
	11月	■新潟圏域ジオパーク「子どもの交流事業」（佐渡市）開催		
令和5年（2023年）	2月	■佐渡ジオパークフォーラム開催		
	3月	■国際海洋ごみシンポジウム（隠岐ユネスコ世界ジオパーク／島根県）参加 ■ジオサイト設定総合計画改定、「サイト設定総合計画」と改名 ■ジオサイト保護保全管理計画改定		
	7月	**■佐渡ジオパーク日本認定10周年記念事業開催**		
		■新潟圏域ガイド意見交換会（佐渡市）開催		
	11月	■日本ジオパーク再認定現地審査実施予定		

新種ツチクジラ和名発表会
「サドムカシツチクジラ」に決定

佐渡ジオパーク　これからの10年

佐渡ジオパークの活動は、2010年に準備室を立ち上げたのが始まりです。そう考えると、既に新たな10年を歩み始めているとも考えられますが、これからの「新たな10年をどう過ごすのか」これが今、私達に与えられた大きな命題です。これまでの活動の何を継続し、どんな違う取組を進めるのか、なかなか明快な答えにたどり着けず、ずっと模索し続けていくような気もいたします。

この記念誌に寄せてくださった方々の原稿にもあります通り、本当に多くの方が佐渡ジオパークの活動に賛同し、ご支援いただきながら、一緒に10年の歴史を築いてまいりました。各位の様々な思いや期待が、ジオパークを大きく発展させた原動力となったことは言うまでもありません。

その中で、佐渡ジオパークの活動に携わる方が口々におっしゃることは、「佐渡の魅力をたくさんの方に知ってもらい、佐渡を盛り上げたい！」ということです。さらに、佐渡の魅力とは、島の成り立ちに支えられた自然や人々の生活の中に見られるストーリーにあると述べられています。

「佐渡ジオパークを知る」ことは、「佐渡島を知る」こととイコールだと思います。佐渡の「大地の恵み」「生き物の育み」「人々の営み」を大切に守り、学び、活かすというジオパークの活動は、人づくり、地域づくりの大事な取組と考えます。

佐渡島はこれから長い年月の中でどんな変遷をたどるのでしょうか。日本は、世界は、地球は‥。技術の進歩や時代の流れとともに失われようとしている大切なものを、後世に残し、持続可能な社会を作ることが、ジオパーク活動の重要な理念です。大地と人々や生物がつながる壮大なロマンを感じながら、地域振興や社会貢献に携われることを誇りに感じています。

これからの佐渡ジオパークの10年は、「やるべきこと」や「やりたいこと」がたくさんあります。約3億年の歴史をもつ佐渡島の未だ解明されていないことの研究に力を入れること、佐渡の人々の暮らしが豊かで、それが未来永劫続くための保全活動や教育活動に力を注ぐことなど、模索を続けながらも、目指すゴールは見えているような気がします。そのゴールに向かって歩み続けてきたことが佐渡ジオパークの「これまで」であり、歩み続けることが「これから」だと思います。

最後になりましたが、この記念誌を作成するにあたり、佐渡ジオパークの立ち上げ当初から今までお世話になってきた方々に、「佐渡ジオパークへの思い」を執筆していただきました。お忙しい中、本当にありがとうございました。

これまで教え、導いてくださった諸先輩方、一緒に活動してくださった皆様に感謝するとともに、今後もご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

佐渡ジオパーク推進協議会事務局

佐渡ジオパーク10周年記念誌

発行日　2023（令和５）年７月
発　行　佐渡ジオパーク推進協議会
〒952-8501　新潟県佐渡市両津湊198番地
TEL　０２５９－２７－２１６２
E-mail　sado-geopark@city.sado.niigata.jp
URL　https://sado-geopark.com/
印　刷　株式会社第一印刷所

本誌の無断転載を禁じます

SADO GEO PARK

佐渡ジオパーク推進協議会